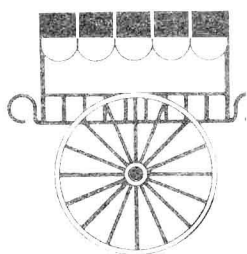

解釈批評の方法



岩元 巖
利沢行夫 訳

大修館書店

批評の方法 2
解釈批評の方法

© I. Iwamoto 1974
Y. Rizawa

1974年 3月10日 初版発行

著者との協定により
検印を廃止する。

訳者 岩元 巖
利沢行夫

発行所 鈴木敏夫

株式
会社 大修館書店

(101) 東京都千代田区神田錦町3-24

電話 東京 (294) 2221 (大代表)

振替 東京 40504

印刷/壮光舎 製本/謙文社

「解釈批評の方法」

について

作品の解釈は批評の重要な機能である。批評の方法は様々にあるが、究極には作品の解釈に批評は到達をせざるをえない。ただ、しかし、解釈とは単なる解説や説明ではないのであつて、著者のハイマンはエドモンド・ウィルソンというアメリカの解釈批評の実践者を論じて、彼が解説批評家にとどまっている点を実証し、より高度な解釈批評のあり方を示唆している。

ここで論じられるエドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson, 1895-1972) は一九一六年にプリンストン大学を卒業した後、最初はジャーナリストとして、後に、作

家、批評家として華々しく活躍した。特に『アクセルの城』(Axel's Castle, 1931)によって、当時ヨーロッパの新しい文学運動の秀れた紹介者となった。彼の著作は全てを記すにはあまりにも多いが、その代表的なものは、『三重の思想家たち』(The Triple Thinkers, 1938)、『フィンランド駅に』(To the Finland Station, 1940)、『傷と亡』(The Wound and the Bow, 1941)、『認識の衝撃』(The Shock of Recognition, 1943)、『愛国の血潮』(Patriotic Gore, 1962)などがある。以上は批評を主としたが、本書の中で論じられているように、小説や旅行記も数多いし、また、イロクオイ・インディアンの研究家としても知られていた。最後の作品は、『ニューヨーク州北部』(Upstate, 1971)という随筆集であった。

岩 元 巖
利 沢 行 夫

目次

解釈批評の方法について	iv
一 解釈批評家ウィルソンの功罪	3
二 ウィルソンの方法——『傷と弓』を中心に	20
三 解釈批評の伝統	30
四 現代における解釈批評	34
五 解釈批評批判	43
原注	83
訳者あとがき	89
索引	98

解
釈
批
評
の
方
法

一 解釈批評家ウィルソンの功罪

本格的な文学と大衆の読書嗜好との間に大きなへだたりが存在する時代には、曖昧で、難解な作品と読者との橋渡しをするという批評家の側に要求される役割はきわめて重要なものとなる。文学作品の内容を「説明する」この解釈批評の分野においては、おそらくエドマンド・ウィルソンが当代一の批評家であると言えよう。そして、ヴァン・ワイク・ブルックスなる特殊な売れっ子をのぞけば、彼が現代批評家の中でおそらく最も世に広く知られているのも決して偶然ではない。チュードル王朝時代の偉大な翻訳者たちは、他国の文学作品を英語に移しかえることによって、それを大衆のものとしたのであるが、現代においては、英語で書かれていても、それをさらに他の英語で説明する必要がある、それによってはじめて大衆に理解される。このようなことはまことに皮肉な現象ではあるが、おそらく重要な意義もまた持つかもしれない。

ウィルソンは自分の仕事を評して、詩を読む上での「脚本」^{シナリオ}を読者に与えることだ、と述べる。

ているが、彼の「脚本」^{シナリオ}の多くのものが非常に貴重なものであったことは疑う余地がない。おそらく、かなりの数多い読者が、ウィルソンのお陰で、ジョイスやエリオットの作品が理解できるものであることを知った。そればかりか彼らの作品が読んでも楽しいものであることを初めて認めたに違いない（作品自体は読まなくても、文学知識をひけらかすことができるほどに詳しいウィルソンの紹介だけを読んでいる人々もまたおそらく数知れないであろう）。彼の最初の作品である『アクセルの城』（*Acxel's Castle*）は、新しい文学の全領域を広い読者層にまで開拓するという点では、現代において、おそらくT・S・エリオットの『聖なる森』（*The Sacred Wood*）に次ぐ効果を与えたであろう。『アクセルの城』において、エリオットの『荒地』の象徴をウィルソンは執拗に頁をつくして詳細に説明していることは忘れがたいし、また、三〇頁にもわたって、ブルーストの大河小説をほとんど場面ごとに要約した驚くべき努力や、ジョイスの『ユリシイズ』の中で起こる出来事とその意味についての長い説明、そのほかこれに類似した彼の努力はいずれも忘れがたいものである。それに、エリオットの書いた夜鳴鳥^{ゲイル}がなぜ「ジャグ、ジャグ」と鳴くかとか、スチーヴン・ディーダラスの母親が小説にどのような意味を持つかとか、あるいはまた、ヴァレリーの「海辺の墓地」の中の昼下がりが無生物

界のものであると同時に、詩人の心にひそむ絶対的なものであり、彼の二〇年間にわたる無為であり、昼下がりのものであるなどということを一般読者に説明するのに、ウィルソンほど適格な人はいないのである。

時には、ウィルソンの解釈は象徴の微妙な分析となるし、また、時には、『三重の思想家たち』(The Triple Thinkers)に収められたプーシキンとジェイムズを論じた章における『エフゲニー・オネーギン』や『螺旋の回転』の長い梗概こうがいにおけるように、それは学生の作品要約レポートそのままに、事件を細かに語ったまさしく粗筋紹介である。さらに、彼の解釈は、シヨアの『リンゴの荷車』(The Apple Cart)を音楽用語に移して解釈した場合のように、見事なほどに独創的な時もあるし、また、『フィンランド駅に』(To the Finland Station)の中で、マルキシズム思想の理論上の核心を僅か二節の文章の中に盛りこもうとしたような、ただ単に野心過剰になりすぎた時もある。だが、いかなる場合でも、少なくとも比較的に文学知識の乏しい読者にとっては、彼の解釈批評はいつも刺激的であるし、また、時には欠くべからざるものとなるのである。

ウィルソンは「解説批評家」の役割を果たす時、本領を発揮する。この言葉はジョン・メイ

シーが定義したもので、「批評家の技術と独特の魅力で、文学に無縁の読者に偉大な作家を紹介する批評家」のことをさす。だが、解説批評家は常に一つのハンディキャップを与えられている。すなわち、読者の文学知識が増し、批評家が論じている作品についての知識が加わると、明らかにそれに呼応して批評家の価値が低下していき、しまいにはそれは比較的文学知識の豊かな読者にとってはほとんど無価値に等しいものになってしまうことである。ウィルソンはこの点を充分に心得ており、常に意識して自分の著作を文学入門者向きに書いてきたし、そして自分のことを本質的には新しい文学の「啓蒙家」と常にみなしてきた。一九四四年、『プリンストン大学図書館報』誌の二月号に発表された自伝的エッセイ「図書目録を作られることに（つづ）」（“Thoughts on Being Bibliographed”）は自分の作品の目録をあげ、それを論じたものであるが、その中で、彼は次のように述べている。

しかしながら、若きジャーナリストにはまだ切り開かねばならない道が二つ残されていた。一つには、より広い国際的な世界で最近生じてきた文学現象——ジョイス、エリオット、ブルーストなど——の理解へ導く道であった。というのは、『エゴイストたち』(Egoists)や『イブセン主義の本質』(The Quintessence of Ibsenism)などの書物によって読書嗜好の境界を定められた読者たちにとって⁽¹⁾は、そのような文学現象はすでに遠い理解の及ばぬものになっていたからである。さらに第二には、

ロシア革命との関連において、最近のマルキシズムの発展を「ブルジョワ」知識人の世界に得心させることであった。もちろん、これらの問題のいずれかを流布させるのに、私が最初のただ一人の間であったわけではないが、しかし、その二つの問題は私が一番関心を払っていたものであったし、私が当時していたことは、私がかつて敬愛していた先人たちの業績と多少論理的に関連があると感じていたのである。

（実は、ここで述べられている先人たちというのは、ショーであり、メンケンであり、ハネカーであるが、彼らはウィルソン自身の一世代前の最も秀れた二人の「啓蒙家」たちであったろう）。ウィルソンはしばしば自らの要約や語義解説や梗概について非難がましい口調で語ってきた。『ニュー・リパブリック』誌に掲載されたライオネル・トリリングの「マシュー・アーノルド論」を評して、彼は次のように述べている。アーノルドの詩や論文についてトリリングが要約した部分は「時々少し退屈になる」と。そして、さらに括弧でくくって、「しかしながら、要約を試みたことのある人間なら誰しも、この種のものを読むに足るものにするのがいかに困難な作業であるかを心得ている」と、加えている。だがそれにもかかわらず、彼は文学に無知な人々にあてた解説の作者として、彼の書く要約がオペラのプログラムにかかれた梗概と同じように欠くことのできないものであることを充分に承知している。

ウィルソンには、秀れた啓蒙家たるべき多くの資質がそなわっている。彼の文体は明快であり、うまみもあるし、どのように難解な素材でも彼は見事に料理して、平易なわかりやすい英語に変えてしまうことができる。彼は非常に幅の広い読書家である。言いかえれば、文学に密接な関連を持つ歴史とか哲学、心理学などのいくつかの分野においても、彼は素人ではあるが少なくとも相当な知識を持っている。特に、現代文学精神の二大必要条件であるマルキシズムと精神分析学については詳しい。また、彼はアメリカ人の批評家としては珍しく数多くの言語を自由にあやつることができる。ラテン語、ギリシャ語（彼は論文の中でソフォクレスを原文のまま引用するくせがあるほどだし、また一度など、アーヴィング・バビットのギリシャ語からの訳文を厚かましくも訂正したことさえあるほどだ）、それにフランス語、そしてマルキシズムの研究に役立てようと中年になって学習したと言われるドイツ語とロシア語をもこなすことができる。

ウィルソンをして文学の秀れた解釈家とするのに役立ったもう一つの特質がある。それはあまりほめられた話ではないが、彼が他人の研究や識見を巧みに利用する、しかも時には出所に対する謝意すら表明せずに利用することである。たとえば、『アクセルの城』や『傷と弓』

(*The Wound and the Bow*)に収められているジョイス論の中で、ウィルソンはスチュアート・ギルバートの高く評価される解釈とか、ハーバート・ゴーマンの伝記、マックス・イーストマンの少々疑う余地のある対談記、『進行中の作品の背景事実調査』(*Our Examination round his Factification for Incunation of Work in Progress*)としてパリで刊行された十数人の作家による『トランジション』誌に書かれたものを集めた論集、それにほかにもいくつかの種多様な書物から得た資料を使っている。マルキシズムに関する知識についても、ウィルソンは少なくとも十数人の同時代人の著作の助けを得たことに謝意を表明している。たとえば、その中に、マックス・イーストマンや、シドニー・フック、マーク・スター、マックス・ノーマッド、ハーバート・ソロー、メアリー・マッカーシーなどのいわゆるこの道の「権威者」として世間に売れている名が含まれているし、その他にも幾つかもう少し学究的な著作からの資料も利用している。ロシヤ文学については、ウィルソンはD・S・マースキーの歴史書二冊と、ブーシキン論、さらにデ・ヴォーグエの『ロシヤ小説論』(*Le Roman russe*)、それに、彼が数年かけて翻訳をしてきたウラジミール・ナボコフの秀れた独特の思考を多く借用している。(ウィルソンは『アトランティック・マンスリー』誌に発表したブーシキンに関する論文でブーシキ

ソンの一つの詩を取りあげ、その音楽性を見事に、そして彼には似つかわしくないほど詳細に分析しているが、これなどおそらくナボコフに負うところが大きい。というのも、この分析を見ればウィルソンがロシア語に実に精通していることがわかるのであるが、同時にまたナボコフでなければできないもののようにも思えるからである。実のところ、ウィルソンの論文のどれを見ても、ほとんどが他人の分析を巧みに利用しているのがわかる。ある場合には、それが布衍されたり、修正されたりし、またある場合には、単によりわかりやすく改めた言葉で言いかえられたりするだけでもある。さらに、ウィルソンは様々な特殊な知識や専門知識を幅広く文学以外の分野から借用しているばかりでなく、文学理論そのものについても、現代のほとんどすべての独創的批評家から借用している、しかもしばしば無断で借用しているのである。⁽²⁾

ウィルソンは自分自身の知識と、他人の知識を利用する能力というものに加えて、物事に相関性を眼ざとく見いだし、そこから普遍的なものを打ち出すという能力をそなえている。これは批評家としては真正銘の鋭い眼識と言える資質で、彼が実践しているような類の解説と解釈の批評には欠くことのできないものである。この能力の証拠を彼の著作に求めるとすれば、あまりにも多すぎて、とてもここに挙げることはできない。しかし、予言というものによつ

て、批評家の分析の価値が評価されるものであるとすれば、ウィルソンが秀れた文学上の予言を数多くなしたということは注目しておくべきである。中でもとりわけ、『アクセルの城』で、エリオットの才能は本質的には演劇にあり、必ずや詩劇という方向にむかつていくことになるであろう、と述べた予言は注目に値するのだ。⁽³⁾

解釈批評を実践していくために必要な以上のような秀れた資質をそなえていたが、と同時にウィルソンにもいくつかの限界や力の及ばぬ点があった。中でも最も根本的な問題は（それが啓蒙家としての彼の成功の大きな要因になっているが、同時にまた本格的な批評家への道を阻む大きな脅威となっていることは疑いもない）文学に対する彼の根本的な見方にある。つまり、彼は文学を完全に独立した形式と内容というものを通して見ている。つまり、内容は作品そのものであり、形式は内容を提示するための道具にすぎないものとしている。『アクセント』誌の一九四二年春季号で、デルモア・シュヴァルツが「エドマンド・ウィルソンの著作」(“The Writing of Edmund Wilson”)と題する秀れた論文を発表しているが、そこで彼はこの事実（ウィルソンの著作を読む読者がほとんど最初に気づくことであるが）を面白い比喻によって説いている。シュヴァルツはこう述べる。ウィルソンにとって、文学形式は「贈物を包んである